

皆の広場

素人の神話考④「インド神話・世界遺産」

自文科

永野 徹

[1]はじめに

①インドの宗教概観

インドの国土は日本の約 8.7 倍、人口は 11 億人超でその内約 83% がヒンズー教徒内約 70% がヴィシュヌ派、約 25% がシヴァ派、残りがシャクティ派とその他が占める。インドの宗教は「多様性の統一」と言われ性格の異なる無数の神々で、信仰はヒンズー教である。常に変容を繰り返して現在も新しい神々が生まれ続けていると言う。紀元前 10 世紀頃に「ヴェーダ聖典」の原形を成立したアーリヤ人は祭祀中心のバラモン教を形成して行った。仏教や、ジャイ教の興隆で一時期影を薄くしたが紀元前 3 世紀頃にはそれまでの宗教的要素を集大成したヒンズー教が誕生した。現代のインドを旅すると商売繁盛の神が掲げられたり、本にも神話の神々が最初に登場するのは 19 世紀後半の画家ヴァルマーの影響が大きい。彼は大衆宗教画の原点のような作品を作り、版画で複製した。

②三神一体神話(トリムルティ)

インド神話の時間は途方もなく果てしなく長い。人々の生きる世界は創造から終焉まで 43 億 2 千万年で、現在は 4 期に分れた最後の「カリ・ユガ」の時期にある。4 期の世界は紀元前 3000 年頃に始まり、43 万 2 千年後には 7 つの太陽によって 100 の干ばつが起き 12 年間雨が降ったあとに大洪水に呑み込まれて無くなると説く。その後、新たに世界は再生されると言う。その創造を司る神が「ブラフマー神」で維持を任される神が「ヴィシュヌ神」、破壊を担う神が「シヴァ神」でこの三神は究極的には同一神＝「トリムルティ(三神一体)」であると言われる。宇宙エネルギーの源となる三大神とその妃のペアは次のとおり。

・ブラフマー神とサラスヴァティー妃 ・ヴィシュヌ神とラクシュミー妃 ・シヴァ神とパールヴァティー妃

③大叙事詩「マハーバータ」「ラーマヤナ」

人類は数多くの叙事詩を持つがインド叙事詩のスケールは完全に他を圧している。マハーバータはギリシャ大叙事詩イリアス、オデッセイを合せた 7 倍にも相当する長編。「ヴェーダ」はヒンズー教の祭典として、祭祀階級のためのものと言う性格が強くて二大叙事詩に共通している事は、宗教的、社会的伝承の強い物語であるが広く大衆に開かれた作品である。

更に両叙事詩の主要なストーリーの割合はラーマヤナが 1/3、マハーバータが 1/5 で、夫々付随させた物語(古い伝承や説話の集大成)がラーマヤナで 2/3、マハーバータで 4/5 とはるかに長いと言う特徴がある。主人公は夫々ヴィシュヌ神の化身ラーマ(ラーマヤナ)とクリシュナ(マハーバータ)である。クリシュナに関わる部分は BC7 世紀以前マウラーに実在した人物で宗教的自覚を達成した後、実践倫理を強調する新しい宗教を広めた人がモデルといわれる。この二大叙事詩は 2000 年以上に渡りインドの民衆の心に住み続けてきた作品である。

「マハーバータ」…「マハーバータ」は遙か昔インドのバーラタ王の子孫であるクル族に起きた歴史上の大戦争をもとに編纂された物語で BC3 世紀ごろにはほぼ出来上がり、AD4 世紀に完成を見た。編纂者は聖仙ヴァーサとなっている。

「ラーマヤナ」…一方、「ラーマヤナ」は勇敢なラーマ王子が悪魔に連れ去られた姫を取り戻す英雄物語で BC5 世紀には原形が出来き AD2 世紀頃に完成したようで、編纂者は詩仙ヴァールミーキと言われている。以下にインド神話誕生から現在までの主な出来事を年表形式で示す。

[2]インド宗教史年表

①「紀元前」(BC)

1200～1000	「リク・ヴェーダ」の成立
800	初期ウパニシャッド成立
800 頃	「プラーフマナ」の成立
500 頃	クリシュナがヤータヴァ族の間で新宗教を開く
500 頃	釈迦入滅(BC485、486、383 等諸説あり)
390 頃	マガタ王国のアジャータシャトル即位
317	マウリヤ王朝誕生(チャンドラグプタ王)
268	アショーカ王即位
BC200～AD200	「マハーバーラタ」の原形の成立(作者:ヴァイヤーサー詩仙) 「ラーマヤナ」の原形の成立(作者:ヴァールミーキ詩仙)
150～100	「バガヴァッド・ギーター」の原形成立

②「紀元後」(AD)

130～150	カニシカ王仏教に帰依
320～500	グプタ王朝(チャンドラグプタ1世が創設し即位)
320～500	「ニヤーヤ・スートラ」成立
378	チャンドラグプタ2世が即位(「ヴィシュヌ教」に帰依)
400～450	「プラーフマ・スートラ」成立
400～450	「ヨーガ・スートラ」成立
400 頃	「マハーバーラタ」「ラーマヤナ」の現在の形が成立
13 世紀	「ラーマヤナ」のタミール語訳、テルグ語訳の成立

次に、インド二大叙事詩のストーリーを覗いてみます。

[3]「ラーマヤナ」(インド叙事詩:その1)

- (テーマ) 「勇敢な皇子が魔神と戦って連れ去られた妃を取り返す」と言う英雄物語
- (登場人物) ラーマ王子(ヴィシュヌの化身):物語主人公で悪魔にさらわれた姫を救出する
シーター姫:ラーマ王子の妃で悪魔にさらわれる
ラーヴァナ:10 の頭と 20 の腕を持つ悪鬼=羅刹(ラクシャナ)が姫をさらう

(ストーリー)

①悪魔の成長

ラーヴァナと言う羅刹(ラクシャナ)=悪魔は苦行を重ねた結果、神にも負けない力を身につけたのでプラーフマーも苦行を認めて「神にも魔神にも殺されない」保証を与えた。但し人間を軽視していたので「人間には殺されない」との保証は与えなかった。やがてラーヴァナは天界を脅かし、神々を苦しめはじめたが神々はこの魔神を殺せない定めなのでヴィシュヌ神に救いを求めた。彼はそれに答えて「私が人間に姿を変えてラーヴァナと戦いましょう」と約束した。

②王子誕生

その頃、アヨーディヤー国のダシャタ王は善政を行う立派な王様でしたが、唯一つ子供が無いのが悩みでした。そこでヴィシュヌはこの王の子供となる事を決意した。やがて、王の3人の妃は全て身ごもった。即ち 第一王妃カウサリヤの子「ラーマ」、第二王妃カイケーーの子「バラタ」、第三王妃スミターの子「ラクシュマナ」の3人。ダシャタ王は全ての王子を大事に育てたが特にラーマ王子には愛情を注いだ。ラーマはラクシュマナと親しく、一緒に武術・学問に励んだ。こうして逞しく育っている所に詩仙ヴィシュバーミトラが「私の神聖な祭祀を魔神が汚している」ので「勇敢なラーマ王子に悪魔退治」の懇願にきた。

③悪魔退治へ出発

ラーマ王子はラクシュマナと一緒に出発した。第1回目の戦いは恐ろしい女魔神タータカの棲む森で始まり王子側の勝利となった。その後、ヴィデーハのジャナカ王の宮殿についた所、美しい姫シータの婿選びの最中で、誰も牽けなかった強弓を楽々とラーマが引いて勝利したので美しいシータ姫と結婚できることになった。年老いたダシャタ王は王位をラーマに譲ろうとしたが第2夫人の反対で14年間の追放を受け入れ再び旅に出てダンタカの森に住まいしたところ、羅刹退治を懇願され「人喰い巨人ヴァーダ」と戦う羽目になり勝利した。

④ラーヴァナ姫を誘拐

そこへ、羅刹の王ラーヴァナの妹が通りかかり、ラーマを一目見てすっかり心を奪われたがラーマから断られたので、兄ラーヴァナにシータ姫がどんなに美しいか説いて、ラーマから奪い取るように進めた。実際にシータを見てその美しさに驚き乞食姿に変身してシーターに近づき姫を誘拐してしまった。これを目撃していた巨大な鳥がいた。ヴィシュヌの乗り物ガルルダが化身した禿鷹シャターユスだった。重大な危機にさらされていると悟った鷹は馬車を追いかけて姫を取り戻そうとするが強大なラーヴァナによって打ち倒されてしまった。姫をランカー島(スリランカ)まで誘拐してきたラーヴァナはシータ姫に妻になるよう脅すが応じないので1年以内に応じないと食べてしまうと宮殿の奥深くに閉じ込めてしまった。姫が誘拐された事を知ったラーマは気が狂いそうになるがラクシュマナに勇気づけられ、誘拐の痕跡探しをはじめ、瀕死の重症に喘ぐシャターユスを見つけて経緯を途中まで聞いたところで息絶えてしまったので更に捜すと顔の無いカバンダに出会った。

⑤猿の英雄ハヌマーン

カバンダの呪いを解いて聞くと「行方不明者の搜索」については猿王スグリーヴァの協力が必要と助言を得てバンバー湖へ向い、彼の臣下で神の武勇を供えたハヌマーンの協力を得る事が出来た。四方八方捜してランカーのラーヴァナが誘拐した事が解った。

⑥ランカー島(スリランカ島)の戦い

早速、ハヌマーンはランカー島まで飛んで姫の安否を探りに浸入して、姫にラーマが助けに来る事を伝えて帰る時にラヴァーの息子インドラジットに捕まり尻尾に火をつけられたので暴れまわって脱出してラーマに報告した。ラーマとラクシュマナはハヌマーン率いる猿の軍団と共にランカー島に渡りラーヴァナの城を包囲したが強力な羅刹の軍団に手こずり、特にラヴァーの息子インドラジットは魔法を駆使して強力であったが、ラヴァーの弟でラーマ王子の味方となったヴィヴィーシャの力で魔法を見抜く事ができとうとうインドラジットを倒す事ができた。全軍の力を振り絞って何とか羅刹たちを倒したラーマの軍勢もラーヴァナの力には及ばずラーマ軍に絶望感が漲っている時に、神々の声が下り不思議な矢が現れた。「これがプラフマーの矢である。これでラーヴァナを射よ」

⑦シータ姫救出

そこでラーマが念じて、この矢をラーヴァナの心臓へ射こみ最強にして最後の羅刹ラヴァーナを倒す事ができ、無事シータ姫を取り戻す事ができた。

⑧戦争後の過ち

シータ姫を無事救出したラーマ王子はアヨーディヤに凱旋して正式に国王の座につき全ての国民から祝福と歓迎を受け真の平和と安心と繁栄が訪れた。ところが変な噂が出廻り始めた。10ヶ月もラーヴァナの所に居たシータの貞節を疑う声が高まりシータの追放にラーマも同意してしまい、妊娠していたシータは森の中の聖者の庵で双子の子供を生みラーマにこの子供達がラーマの子供である事をシータ姫自身の命と引換えに証明することを決意した。「この子たちはあなたの子供です。もし私の言う事が真実なら大地の神が私を受け入れてくれるでしょう」と、見る見るうちに大地が割れてシータを抱いてそのまま地の底深く消えてしまった。シータ姫は無実の証明の為に自らの命を引き換えにしたのである。悲しみに打ちひしがれたラーマは王位を子供に譲り昇天した。

[4]「マハーバーラタ」(インド叙事詩:その2)

(テーマ) バラタ王の子孫クル族に起きた歴史上の大戦争を元に敷衍した物語

(登場人物) バートウ弟王:クル族の前王、ユディシュティラ王子:バートウ弟王の長男で優秀
アルジュナ王子:バートウ弟王の三男で勇敢、
ドリタラーシュトラ兄王:クル族の現王で盲目、
ドゥリヨーダナ王子:兄王の王子で悪質

(ストーリー)

①王位争い

兄ドリタラーシュトラは盲目故に弟バートウに王座を譲っていたが、弟が早死にしたので後を継いで王位を継承し「弟の5人の王子」を面倒見ていた。武術や学問のいずれにおいても自分の100人の子供達より優れていたため王位継承者として弟王の長男「ユディシュトラ」を指名したのだが、これを知った我が子である長男「ドゥリヨーダナ」以下が強く反発してユディシュティラ等5人の王子を都から追放してしまった。

②帰国と国土の分割統治

ユディシュトラ達はバラモンの修行者に姿を変えてバンチャラ国に辿り着いた所、そこでは「王女ドラウパディー」の婿選びの弓技大会が開かれており第三王子「アルジュナ」が見事に的を射抜いて優勝し、「王女ドラウパディー」を連れて帰国したので「ドリタラーシュトラ王」は喜び彼等に国土を半分に分割して治めさせた。

③12年間の再追放

それにも拘らず「長男ドゥリヨーダナ」達は5人兄弟を再度国外へ12年間追放してしまった。5人の王子達は12年間その言葉通り国外で過ごし13年目にマツヤ国のヴィーラータ王の宮殿に密かに帰ってきた。ヴィーラータ王は喜んで娘ウッターラをアルジュナとドラウパディーの間にできたアビマニュに嫁がせた。13年間の間に、ドゥリヨーダナに使者を送り領土の返還を求めた所、彼はそれに応じなかった為に戦争に突入してしまった。

④大戦争の勃発

クル一族は両陣営に分かれて、18日間に渡る大戦争へ突入してしまった。10日目に雨のように打たれた矢でドゥリヨーダナ側の長老ビーシュマが戦車から落ちて倒れ、彼が停戦を忠告したがドゥリヨーダナは

承服しなかった。

⑤バガヴァット・ギーター

クル族の両軍は戦争前に各国に使者を送って加勢を求めている。中でもトウルカー王国の「クリシュナ」は特に高名だったので、アルジュナとドリウヨダナ双方が自ら赴いて夫々協力を懇願した。クリシュナはどちらにも力を貸すと返事し、ドリウヨダナ側は「兵士全員」の加勢を求め、アルジュナ側はクリシュナたった1人を戦車の御者として加勢を求めた。

⑥クリシュナの教え

アルジュナは親族同志の争いに心を痛め戦意を喪失しかかるがクリシュナは戦いを躊躇している王子に対して「戦いを仕事として最高の神に捧げて戦いが成功しても失敗しても心の平静を保つ事が最高の悟りの境地でヨーガと言うものである」と諭す。(ヴィシュヌの一切相:ヴァイシュヴァルバー)クリシュナは喜んで殺戮を勧めているのではなくて、自分の因縁や歴史の全てを受容れて断固として戦わねばならないと説いたのです。結果を考えず執着と欲望から離れてこそ絶対者への道であると説いた。

⑦ヴィシュヌ神

クリシュナは光り輝くヴィシュヌの姿になってアルジュナに言った。「あなたが私に心を注ぐ時、神の恩恵によりあらゆる困難に打ち勝つ。」結果を考えない無私の行為が武人としての真実の実践と信仰者としての解脱への道だと教え、いつも瞑想することを心がけ心の統一を説くクリシュナとの対話を終えてアルジュナは迷いを吹っ切れた。

⑧勝利の戦い

かくして、凄惨にして苛烈な18日間の戦いはアルジュナ側の勝利に終わる。勝者の五王子の長兄ユディシュティラは無敵の支配者として君臨したが対戦で殆どの一族を無くした事から他の兄弟と共に神々の住む最高の山ヒマラヤに登ることを決意して実行するが、その道は険しくたった一人最高の地に辿り着いて、兄弟達の魂が地獄にあることを知り自分も地獄に留まると言った。この言葉でユディシュティラと兄弟達は永遠の神の世界に入った。

以下引き続き、インド神話の物語が描かれた壁画でもあり、インド神話・仏教の遺跡として有名な「アンコールワット・トム遺跡」の概要を以下に紹介します。

[5]アンコールワット・トム遺跡(カンボジア)

(1)はじめに

インドの神々・仏陀の遺跡はアンコールワットとかボロボトール等周辺国でも著名である。最も有名な仏教、ヒンズー教の遺跡が本国のインドだけでなく、カンボジア、タイ、中国、日本、韓国、インドネシア等アジア周辺国にあることはこれ等の文化・宗教の偉大さを新めて感じるものです。インドシナ半島の中央に位置するカンボジアはメコン河とトンレサップ湖付近を中心とした農業国である。首都はプンペンで公用語はクメール語、面積は日本の約半分 18 万 K m²で人口は約1330万人の国勢。カンボジア最大の見所は世界文化遺産であるアンコールワットとその周辺の遺跡で、ジャングルの奥深く埋もれていたクメール人の遺産である。

(アンコール王朝の歴史)

① カンボジア古代(802 年～)

カンボジアは紀元1世紀ころ、南部の扶南国を中心に繁栄していたが、同じころメコン河中流域を領地として繁栄していたクメール人が4世紀頃に南進し7世紀前半には現在のカンボジアを領域を支配し、

802年ジャヤヴァルマン2世がアンコール王朝を建国。続いて、インドラヴァルマン1世が都城を現在のロリュオス遺跡に移動し、その後889年ヤショーヴァルマン1世がバケン山のヤショダラプラに都を移した。

②アンコールワット(1113年～)

ヤショダラプラに都城や寺院、祠堂、用水池が300年に渡って整備され、1113年に即位したスーリヤヴァルマン2世の時代にそれまでの宗教観、建築技術、装飾、様式を集大成してヒンズー教の神々を祀る施設であり、自らの墳墓でもあるアンコールワットの建設を開始し、約30年間で完成させた。大環濠、参道、回廊、塔堂からなる壮大な伽藍配置は神々の世界を具現化し当時のクメール人の宇宙観を示すものと言えます。

③アンコールトム(1181年～)

1177年チャンバ軍に攻め込まれ、アンコール都城を占領されるが1181年ジャヤヴァルマン7世がトネルサップ湖で勝利して王朝を奪回した。ジャヤヴァルマン7世は敬虔な仏教徒で、建設王とよばれ、最大の仏教建築遺跡としてアンコール・トムを建立した。その後、インドシナ半島の大部分を支配する大王国へと発展した。

④王朝衰退(1431年～)

栄華を極めたアンコール王朝はジャヤヴァルマン7世の死後拡大と衰退が始まり15世紀前半にアユタヤ王朝に滅ぼされ廃墟となって密林の中に眠る事になる。

⑤遺跡発見(1860年)

16世紀にこの地を訪れたスペイン人やポルトガル人の宣教師たち修行者により一部の遺跡調査がなされて、アンコール遺跡の偉大さが書物に残されたりしたが世間に知られることにはならなかった。その後1860年にフランス人アンリ・ムアがアンコール探訪記を雑誌に発表してから世紀の大発見として世界の注目を浴びる事になった。

⑥よく知られたクメール語

アンコール	: 町、都	パライ	: 貯水池	ワット	: 寺、寺院
スレイ	: 女性	プノン	: 山、丘	メボン	: 思慮溢れる母、大池中寺院
トム	: 大きい	プリア	: 聖なる	メール山	: 須弥山

(2)アンコールワット遺跡

①はじめに

・天空に近づくピラミッド型石造寺院

建築年代:12世紀半頃、建築者:スリヤヴァルマン2世、様式:アンコールワット様式

信仰:ヒンズー教、遺産:1992年世界文化遺産

アンコールワットは12世紀前半にスーリヤヴァルマン2世によって30年あまりの年月を費やし建造された巨大な石造寺院である。

ヒンズー教のヴィシュヌ神に捧げると共に王自身の墳墓として建造されたもの。周囲は長さ5.6kmの環濠で囲まれ、西塔門から真直ぐのびる参道を進むと中心に向って高くなる3重の回廊があり、中央には世界の中心であるメール山(須弥山)を模した塔堂がある。中央に歩むほど天界へと近づくピラミッド型の大伽藍は当時の建築技術の高さと優れた芸術性に溢れ、当時のクメール人宇宙観・宗教観を象徴する建造物である。

② 遺跡の概要

アンコールワットへの正面入口は寺院の西参道側の西塔門で石畳が真直ぐ540m続き大海を意味する

壕を渡ると参道両側欄干に、ヒンズー教の蛇神ナーガが配置されている。

(第1回廊) 一番外側の第1回廊は高さ5m東西200m南北180mで一周は760m。

西面南側 第1回廊正面右手は古代インドの叙事詩「マハーバータ」のレリーフがある。

パンダヴァ族とカウラヴァ族が王位を巡り戦う物語が描かれている。兵士・馬・車・武器が細密に描かれ、当時の戦争のスタイルが良く解る。

西面北側 西面左側には、ヒンズー教の祭典「ラーマヤナ」神話が描かれている。英雄ラーマ王子率いる聖軍の隊長である猿の軍団ハヌマンが悪魔ラヴァナを討つ大迫力シーンである。

南面西側 南面にはアンコールワットを建立したスーリヤヴァルマン2世の行軍の様子を描写

南面東側 奥の東面は「天国と地獄」が上段に天国、下段に地獄が描かれており中段には死と裁判を司るヤマ神が裁定を下している。特に針地獄、ムチ打ち刑火責め、舌抜きなど刑事罰がリアルに描かれている。

東面南側 東面南側のレリーフにはヒンズー教の天地創造の神話、不老不死の妙薬アムリタを入手するために神々と阿修羅が大蛇の網を引き合い、乳海を攪拌する「乳海攪拌」が描かれている。

(第2回廊) 第1回廊から第2回廊へ進む途中に南北交叉する「十字回廊」がある。回廊内部は4つの池があり信者が礼拝前に沐浴した場所と言われる。17世紀にここを訪れた日本人「森本右近太夫」で日本語墨書が残る。第2回廊は東西115m、南北100m、1周430mあり、外壁には女神デヴィアターの彫刻が無数にある。

(第3回廊) 第3回廊は1辺60mの正方形で中央にメル山を模した地上65mの祠堂と4隅に塔が配置されている。中央祠堂には過って、ヴィシュヌ神と王が合体したヴィシュヌ・ラージャ神王像が祭られていた。

(3) アンコール・トム遺跡

①はじめに

・密林の中に浮かび上がる王城・仏教遺跡

建築年代：12世紀後半から12世紀初頭、 建築者：ジャヤヴァルマン7世、 様式：バイヨン様式 信仰：大乘仏教

1181年ベトナム中部のチャンパ王国に支配されていた王国を奪還して王位についたジャヤヴァルマン7世がクメール王国再建の為、造営した城塞都市。観世音菩薩を祀る仏教寺院バイヨンを中心に、神殿、王宮、テラスなど様々な施設が点在する。大きな町を意味する「アンコールトム」は12世紀末から13世紀初頭にクメール王国最後の王「ジャヤヴァルマン7世」によって建立された都市で当時ヤシャガラプラと呼ばれていた。都は113m幅の環濠と高さ8m1辺3kmの壁で囲まれた城塞となっており、外部へ通じる5つの城門は朝開き、夜は閉じた。場内は主要道路が十字に走り、中心には仏教寺院のバイヨンが聳えている。林立する四面観世音菩薩像や庶民の暮らしや戦争を描いたレリーフがある。アンコールトム全ての四面仏は東西南北を向いて四方に隈なく慈光を放つアンコールトムは1辺3kmの正方形土地でこれを四つ切にすると中心がバイヨンでアンコールトムを4分割すると主要な施設は北西部に建造されている。

- ・北西部：王宮、ピナカス、パブーオン、象のテラス
- ・南東部：死者の門
- ・北東部：プリアピトゥ、12の塔、北クリヤン、勝利の門
- ・南西部：

②遺跡の概要(アンコールトム)

南大門：アンコールトムには5つの門があり、アンコールワット側から南大門が入口となる。

南大門に向って左側に54体の神々、右側には54体の阿修羅像が並び、どちらも大蛇ナーガを網にして引き合っている。門の上にはジャバルマン7世が最も崇拝した巨大な観世音の四面仏がある。

バイヨン:南大門をくぐるとアンコールトムを中心とする寺院、バイヨン神の棲む聖域とされるメール山(須弥山)を模したもので世界の中心と言う意味で建造された。城壁はヒマラヤを、壕は大洋を表し、正面はテラスのある東側で寺院内には高さ42mの中央殿を取り囲むように16の尖塔が林立しその頂部には「クメールの微笑み」と呼ばれる表情豊かな観世音菩薩の巨大な顔が刻まれている。回廊の壁には当時の貴族や庶民の生活の様子を表す彫刻がまた、バイヨンの中心に聳える中央本殿の塔内部には当時リンガが祭られていた。

(第1回廊) 第一回廊にはジャヴァルマン7世が統治していた頃のクメール人の生活の様子が描かれている

東面南側 王の行軍の様子、クメール戦士や顎鬚を生やした中国人傭兵と更には料理を造る人、市場の競りの様子や踊り子の姿が見られる。

南面東側 正面の南面右側には、上部が水上尖塔の様子が、下部には投げ網打つ漁師や闘鶏やチェスに興じる様子など人々の活気に溢れる暮らしが描かれている。

南面西側 象軍を主体としたクメール軍の行進とティンバ軍との戦いの様子。

西面南側 建築の様子と虎から逃げるバラモン僧など

西面北側 退却する軍 北 東 面 敗軍や合戦の様子

(第2回廊)

東面南側 2人の武将の戦い、王や王妃の行列、小鳥を持ったデヴァダー

東面北側 車に乗る王と王妃

南面東側 王妃や王宮の様子、ライオンと戦うクリシュナ

南面西側 顎鬚を生やしたシヴァ神とヴィシュヌ神

西面南側 カレーダに乗ったヴィシュヌ神、てこの原理で石を積み上げる様子。

西面北側 乳海攪拌など

北面西側 大蛇ナーガと動物たち、船に乗る王と王妃、ナンデイン牛に乗るシヴァ神

北面東側 シヴァ神とウマー、アルジュナとシヴァとの戦い、カイラス山を揺るがすラーヴァナ

以上のとおり「インド神話とその世界遺産」の報告を終わります。

作成 H22.10.26

(おわり)